



「憎しみ」のない町の舞台裏

～後編～

差別や偏見が少なく住みやすいレキシントン町の噂を聞いてこの町を選んだアジア系移民は多い。私もそのひとりだ。だが、たった半世紀前にはレキシントンは今のような町ではなかったのである。

◇

第二次大戦後にドイツ系移民のマンさんが住み着いたときには、この町は農業中心で現在多数派の民主党員は彼を含めてたったの4人しかいなかった。また、2000年には人口の約12%を占めるようになったアジア系住民も、約50年前に中国系移民のワングさんがこの町に越してきたときには数人だけだった。ワングさんは、細い道に迷い込んだときに警察官に車を止められ、「まるで犯罪者のように扱われた」と嫌な思い出を語った。

ワングさんたちパイオニアのアジア系移民は、古くからの住民たちに受け入れられるために「TakeだけでなくGiveもしなければならない」と図書館改造の際に資金を集めたり、ボランティアをするなどの努力を重ねてきたが、「Civil Right Movement (黒人公民権運動)」の恩恵を受けていることを忘れてはなりませんよ」と歴史的背景の重要さも強調する。両親がキューバからの移民だというディアス(本名)さんは、自分の子供が素晴らしい学校生活を送ることができたことへの恩返しとして引退後、教育委員として毎日無償で町のために働いている。

現在の住みやすいレキシントン町に変わるためには、古くからの住民と新たな住民の特別な努力が必要だったのである。

◇

だが、理想郷のそんな背景を、最近越してきたアジア系住民はほとんど認識していないばかりか尊重もしていないように思えてならない。小学校ではアジア系の学生が約3割にまで急増しているというのにアジア系の親のPTAボランティアは少ないままである。町の人口も同様の傾向を示しているが、アジア系のボランティア人口は少ない。NPFH^{※1}などの町の委員会やPTAへのボランティア参加を呼びかけるたびに、「うちの子は学校で困っていないから」、「税金を払っているだけで義務は果たしている」、「町の住民と知り合いにならなくても十分やってゆける」といった、押し売りへの「間に合っています」的返答が戻ってくる。

アジア系の親が「アジア系の学生が多いからレキシントン公立学校は成績が良いのだ」と誇らしげに語るのを何度か耳



にしたことがある。この面で町に貢献しているのだから感謝してもらいたいとばかりの言い分だが、低収入の高齢者にとっては公立学校の成績の良さは必ずしも歓迎すべきことではないのである。古くからの住民にとって、「良い公立学校」は、その学校に子どもを通

わせるために引っ越してくるアジア系移民の増加を意味し、それは、学生数の増加と教育費の上昇に伴う固定資産税の上昇を意味しているのである。

◇

3年前、私がある行政委員の依頼で町に存在する対立の種類と原因を探る委員会に参加したときのことである。

「これ以上税金が増えたら、もうこの町には住めない」と涙ながらに訴えた老人に続き、チャリティ活動で知られる団体の代表が「ある人々」についての率直な意見を述べてくれた。

「学校のためにこの町に引っ越してきて、われわれ隠居者の税金を使って子どもを学校に通わせ、卒業したら(高い税金を払いたくないから)さっさと逃げてゆく。他人を利用することしか考えていない」

彼が私から視線をそらしていたのは、アジア系移民について語っていたからだと感じた。「当然のようにTakeするがGiveはしなくても良いと思っている」、そんなアジア系移民についてのイメージが定着すると、いつか不満が噴出するにちがいない……。

今年2月にレキシントン町で起こった事件とその余波は、私の不安をさらに深めた。(次号へつづく)

※1 No Place For Hateの略。「人々の違いの進化を認め、偏見や差別がないコミュニティを促進する」ことを目標に「Anti-Defamation League」が「The Massachusetts Municipal Association」との提携で1999年に始めたキャンペーンのこと。当初NPFHコミュニティ宣言をしたのはマサチューセッツのわずかな市町にすぎなかったが、現在は全米に広がっている。「バトルグリーンVol.2」(『たからまがじん』2007年5月号掲載)をご参照ください。※文中の登場人物は例外を除いて全て仮名です。(先月号では注釈が抜けていましたが、先月号も同様です)

わたなべ ゆかり・一九六〇年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。二〇〇一年、フリーライターとして第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。二〇〇三年、二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。